

越後平野における生態系ネットワーク 生息環境検討部会(第3回)
議事要旨

- 日時：令和7年6月4日（水） 15:00～17:30
- 場所：北陸地方整備局1階記者会見室（Web会議併用）
- 配布資料：
 - ・次第
 - ・出席者名簿
 - ・資料一1 第2回生息環境検討部会および第5回協議会開催概要
 - ・資料一2-1 越後平野における生態系ネットワーク形成行動計画(2035)（案）
 - ・資料一2-2 取組照会結果および対応案
 - ・資料一3-1 調査・評価
 - ・資料一3-2 阿賀野川自然再生事業の取組
 - ・資料一3-3 潟・池(1)湿地の再生 福島潟の掘削について
 - ・資料一3-4 潟・池(2)水生植物①越後平野内のヒシについて
 - ・資料一3-5 潟・池(2)水生植物②佐潟の状況について
 - ・資料一3-6 潟・池(3)瓢湖の現状について
 - ・資料一3-7 有機農業について
 - ・資料一3-8 越後平野における自然共生サイト登録状況について
 - ・【参考資料1】 生息環境検討部会設立趣旨、規約及び委員名簿
 - ・【参考資料2】 第2回生息環境検討部会 議事要旨（案）
 - ・【参考資料3】 第5回協議会 議事要旨（案）
 - ・【参考資料4】 第6回活用部会 開催概要

■出席者（敬称略）：

**越後平野における生態系ネットワーク推進協議会
第3回生息環境検討部会 出席者名簿**

(敬称略)

氏名	所属役職	参加方法	備考
<委員>			
関島 恒夫	新潟大学 農学部 教授	対面	
河口 洋一	徳島大学 大学院社会産業理工学研究部 准教授	WEB	
藤田 美幸	新潟国際情報大学 経営情報学部 経営学科 教授	対面	
佐藤 安男	新潟県水鳥湖沼ネットワーク 事務局長 水の駅「ビュー福島潟」 副館長	対面	
藤元 栄一	北陸農政局 農村振興部 農村環境課 課長	WEB	
刈部 博文	関東地方環境事務所 野生生物課 野生生物課長	WEB	(代理) 課長補佐 最上 祥成
伊藤 弘幸	新潟県 土木部 河川整備課 課長補佐	WEB	(代理) 副参事 丸山 孝行
長谷川 和徳	新潟県 農林水産部 農産園芸課 課長補佐	WEB	(代理) 副参事 小林 孝章
神藏 直樹	新潟県 農地部 農地計画課 課長補佐	WEB	(代理) 副参事 東條 貴文
川口 晴男	新潟県 環境局 環境対策課 自然共生室長	WEB	(代理) 係長 五十嵐 康紀
小林 久剛	新潟市 土木部 土木総務課 土木総務課長	WEB	(代理) 課長補佐 中山 博志
小林 友衛	新潟市 農林水産部 農村整備・水産振興課 農村整備・水産振興課長	WEB	
田辺 博	新潟市 環境部 環境政策課 環境政策課長	対面	(代理) 課長補佐 佐藤 貴光
近藤 芳博	長岡市 環境部 環境政策課 環境政策課長	欠席	
坂上 新一	新発田市 環境衛生課 課長	対面	
北沢 茂樹	信濃川河川事務所 副所長	WEB	
松崎 竹史	信濃川下流河川事務所 副所長	WEB	(代理) 事業対策官 酒向 秀典
佐々木 洋一	阿賀野川河川事務所 副所長	WEB	(代理) 専門調査官 原 俊彦
<他出席者>			
長谷川 希和	関東地方環境事務所 野生生物課 課長補佐	WEB	
新井 孝尚	関東地方環境事務所 野生生物課 生息地保護連携専門官	WEB	
原澤 翔太	関東地方環境事務所 国立公園課 課長補佐	WEB	
北橋 隆史	関東地方環境事務所 佐渡自然保護官事務所 首席自然保護官	WEB	
斎藤 太一	新潟県 土木部 河川整備課 主任	WEB	
土田 真生	新潟県 土木部 河川整備課 技師	WEB	
本橋 謙治	新潟市 土木部 土木総務課 企画班 主幹	WEB	
板井 隆斗	新潟市 環境部 環境政策課 主事	対面	
川上 隆幸	新発田市 農林水産課 生産振興係	WEB	
佐藤 真理	新発田市 農林水産課 生産振興係	WEB	
<事務局>			
板倉 舞	北陸地方整備局 河川部河川計画課 課長	対面	
山崎 審人	北陸地方整備局 河川部 建設専門官	対面	
今井 孝幸	北陸地方整備局 河川部河川計画課 河川環境係長	対面	
中村 美羽	北陸地方整備局 河川部河川計画課 河川環境係	対面	
佐藤 伸彦	(公財) 日本生態系協会	対面	
伊藤 紗理子	(公財) 日本生態系協会	対面	
藤田 旭美	(公財) 日本生態系協会	対面	

■議事

(1) 第2回生息環境検討部会および第5回協議会の報告

委員 A

- ・生態系ネットワークが不可欠であるという認識を深め、生息環境検討部会のメンバーがその必要性を第三者に説明できるよう、理解を深め、政策決定の際に活かしていただきたい。
- ・河川や森林などの景観要素をつなげていくことが生態系ネットワーク形成事業として目指すことを、農地関係の方にも十分理解していただけるよう、改めて説明する必要があると思う。

(2) 行動計画策定に向けた検討

委員 B

- ・生息環境づくりの取組内容について、「潟・池」や「農地」における環境整備の中には外来種対策が含まれているが、「河川」における環境整備の中に入っていないのは何故か。

事務局

- ・取組内容の中に具体的な外来種対策という項目はないが、内容に溶け込む形で入っている。
- ・自然再生事業では年に一度洪水による攪乱が起きるようにすることで、外来種が繁茂しにくい環境づくりを進めている。それだけを目的に実施しているわけではないが、取組内容の括弧内に示すことは可能かもしれない。

委員 B

- ・明記いただけるのであれば構わない。

委員 A

- ・河川整備の中での外来種対策については明記していただいた方が良い。栃木県小山市のセイタカアワダチソウの除去プロジェクトのような、大規模な対策を今後各地で展開するためには、外来種対策の取組をピックアップしても良いと思う。
- ・生態系ネットワークの形成が外来種の分布を拡大する懸念があるため、同時並行でしっかり考えていかなければならない。国土交通省はモニタリングと、侵入が確認された際の早期対策をとることが重要だと思う。

委員 C

- ・吉野川流域ではナガエツルノゲイトウやボタンウキクサがものすごい勢いで繁茂している。関東でも深刻な状況で、国が躍起になって対応している。信濃川下流域でまだ侵入していないのであれば問題ない。

委員 A

- ・「生息環境づくり目標カテゴリー」として「ガン類・ハクチョウ類・トキ共通」と示されているが、それぞれの指標種に特化した対策も明記する必要があると考えられる。
- ・「優先的に取組む地区」の図は、トキの優先地区と、ガン類・ハクチョウ類の優先地区が見

分けられるように示してもらいたい。

- ・「優先的に取組む地区」の項では、選定地域、非選定地域での取組のあり方について丁寧な説明が必要である。また、他の優先的に取組む地区が参考にできるよう、ここで福島潟におけるモデルプロジェクトの取組を紹介するとよい。行動計画は手引書としてきめ細やかな内容が望ましい。

事務局

- ・素材はあるので、コラムなどの形で作成可能である。

委員 A

- ・行動計画は、次回協議会で正式に承認される予定である。この行動計画に基づいてさまざまな主体と連携して進めていくことになる、重要なバイブルとなる。お気づきの点や意見があれば、事務局にご連絡いただきたい。協議会でも意見が出ることが予想され、修正もあると思う。
- ・行動計画として一旦確定するが、今後必要に応じて更新していくという文言もあるので、そこまで固く考えなくても良いだろう。

事務局

- ・作成後も、フォローアップやバージョンアップをしながら更新していくものである。

委員 D

- ・21 ページの「新潟県水鳥湖沼ネットワーク」の活動日は毎週金曜日に修正いただきたい。

(3) 生息環境に関わる取組

委員 A

- ・SNS 市民ハクチョウ調査は非常に重要だと考えるが、市民調査の結果のデータはどのように活用されるのか？
- ・ハクチョウ類の位置情報がリアルタイムで把握できるような、情報インターフェースとして使われると良いのではないか。新潟駅でこの情報が見られるようになれば、アドベンチャーツーリズムの活性化につながるのではないかと思う。

委員 E

- ・NPO 法人新潟湿地都市研究所が取組んでいる。活用についてはまず、市民の関心を湿地と結び付け、手軽に鳥をカウントする活動に参加するという点に重点を置いている。結果についても公表する予定。
- ・NPO 法人が立ち上ったのは去年の 11 月で、これから活動を進めていく段階である。

委員 A

- ・阿賀野川自然再生事業は非常に重要な取組だと思う。取組箇所を 10 箇所選定されたとあったが、農地と関連して調整されているのか伺いたい。

- ・勉強会などの形でも良いので、生態系ネットワークのプラットフォームに農地側と阿賀野川河川事務所に入っていただき、連続性の確保に取組んでいる箇所と、上流側のガン類・ハクチョウ類やトキにとっての重要なエリアとを結び付けるような協議をしてほしい。
- ・一つでいいので、「優先的に取組む地区」として選定されている地域に対して、河川と農地の取組で連続性を確保するという形になると、国土交通省の生態系ネットワークの事業としても、すごく重要なポイントになる気がする。

事務局

- ・阿賀野川自然再生事業では、河川と水田との連続性と、生態系ネットワーク協議会との連携は今後の課題として挙げられている。

委員 F

- ・農地の方で連続性確保のための取組に協力していただけるところがあれば、そこから一緒に進めていくのが良いと考える。
- ・整備箇所の選定で淡水区間を選定した理由をお伺いしたい。日本の魚類は多くの種類が両側生息型であり、海などでも生きたりするので、将来的な展望を見据えると、淡水に限らず対象を広げても良いのではないかと思った。

委員 G

- ・詳細は分かりかねるが、対象が淡水魚ということから淡水区間が設定されたと思われる。下流の方は汽水域も含まれる。

委員 A

- ・佐潟ではヒシが消失したことだが、河川における分布などから、現状でどれくらいの生産量があるのかがわかると良い。
- ・ヒシ類の一部を人間が利用する可能性や、マーケットの開発などの展開があるとすごく魅力的である。それも含めて、生態系ネットワークの検討が進められると良いかと思う。

事務局

- ・佐潟の環境改善の取組が令和 3 年から始まったということだが、何がきっかけだったのか？

委員 H

- ・ハスの消失が 2018 年くらいから生じたことを受け、令和 2~3 年ころから水門の利用による水管理などから始めた。ここ最近ヒシ、ハス、オニバスが生育していないことから、かなり本腰を入れた対策として位置づけ、予算付けをしながら進めている。

委員 A

- ・ミシシッピアカミミガメの対策として、小山市の調査でコウノトリがカメ類を食べることがわかっている。佐潟でも過去にコウノトリが確認されているので、この際、誘致すべく

巣塔を設置してはどうか。

- ・外来種対策として佐潟のどこか一か所に巣塔を設置し、もしも繁殖が確認されれば、観光名所として多くの方が訪れるようにもなる。下越に誘導するという意味では、検討しても良いのではないか。
- ・生態系ネットワークに関する取組を実施したなかで飛来してきたという流れが良いと思う。

委員 H

- ・当初専門家に現地をみてもらった際に、ミシシッピアカミミガメは最低でも 10,000 匹くらいいるのではないかと言われた。10 年以上かかる試算だが、目標は毎年 1,000 匹捕獲することとしている。

委員 A

- ・非常に好適な餌場であれば、コウノトリに食べてもらえると思う。人海戦術の限界がある中で、様々な効果が期待できると考えられる。
- ・3-6(瓢湖の現状)について、福島潟のグループと一緒に取組めるよう、繋げていきたいところであり、今後紹介する機会もあると思う。
- ・3-7(有機農業)について、将来的には、越後平野全体にこういった農法が広がっていくような展開になるように、ぜひ生態系ネットワークからも推進できれば良い。
- ・3-8(自然共生サイト登録状況)について、「ふれあいファーム」の取組風景が、まさに佐渡でトキが生息する好適な場所といった雰囲気である。越後平野の中でこのような場所が選定され、地域の人たちの後押しによって餌場として創出されたときに、自然共生サイトとして登録したいという地域があれば、生態系ネットワーク形成事業として推進できれば良いと思う。越後平野内の地方自治体の 30by30 の取組であり、ネイチャーポジティブに貢献できる形になると良い。

(4) その他

- ・特になし。

以上